

NCS HOKKAIDO

Nature Conservation
Society of Hokkaido

2004年 2 月 NO.121



2004. 台風10号で全面決壊した大規模林道「平取・新冠区間」
撮影 寺島 一男

..... CONTENTS

チヨットひとこと.....	
市川 守弘.....	2
壊れゆく北海道の森.....	
寺島 一男.....	3
昆虫好きの想い(3).....	
黒田 哲.....	6
北海道各地のニュース.....	8
あ・ら・か・る・と.....	10
2004年自然保護学校開校の お知らせ	
寄贈図書	
活動日誌・要望書.....	11
お知らせコーナー.....	12

春を呼ぼう

北海道の冬らしくない、ベトベトした湿った雪が舞う札幌です。これも温暖化のせいでしょうか。そうは言ってもやはり寒い日が続きます。冬来たりなば春遠からじ、などと言いますが春はまだまだ遠いようです。イラクには憲法を無視して自衛隊（日本陸軍）が進駐し政治の春もますます遠ざかっています。大量破壊兵器がなければアメリカの侵攻は侵略そのものです。日本は侵略軍に加わる連合軍としての進駐にはかなりなせん。道内では平取ダムは昨年の台風被害を理由に建設に向けて着々と進んでいます。行政の冬はまだまだ続くようです。大規模林道は天下った官僚が建設をゴリ押し、シマフクロウやナキウサギが犠牲になろうとしています。



イラクもダムも林道も高速道路もすべて官僚が牛耳っているから、と思うのは私だけではないでしょう。市民の声が行政に全く反映されない結果が官僚政治の独走を許し、腐敗していく元になっています。「市民参加」「市民との協働」と言っても現実には力の差は歴然としています。事業の見直しをするという「〇△委員会」は行政に追従するだけのようです。やはり、NGOが大きくなって官僚政治と力で対決できるようになれば真の参加や協働は生まれません。今こそ北海道自然保護協会が大きく羽ばたく時期に来ています。

NGOが大きくなるのに、「弁舌鋭い運動家」はいりません。少し前まで自然保護の人たちは、二極化していたように思います。一つは野山を歩き、自然を観察することで満足し、そこにある開発問題には見てみぬ振りをするタイプ。もう一つは鉢巻をまいて行政に怒鳴り込むタイプ。後者は勇ましいのですが、普通の市民からは敬遠されていたように思います。自然を守ると言うことは、一人一人が自然に親しみ、自然を理解しながら、ダメなものはダメと言えることだと思います。「運動家」でなくとも、いろいろなタイプの一人一人の市民が力をあわせればよいのだと思います。署名だけができる人、学習会に参加できるだけの人、カンパができるだけの人、働く仲間や商店主や主婦や年金生活の人、いろいろな人がいろいろな人なりにできることをしましょう。もし、これらの人たちが10万人集まったら北海道の自然はたくさん保護されることでしょう。春になって北海道の花が咲き乱れ、様々な鳥が歌を歌いながらヒナを育てる……いいですね。

凍った大地に春を呼ぶためにみんなで力を合わせましょう。

(札幌在住)

市
川
守
弘

壊れゆく北海道の森

— もう止めよう大規模林道 —

寺島 一男

大規模林道は、2003年10月から独立行政法人になった緑資源機構（前緑資源公団、旧森林開発公団）が、全国7カ所の森林地帯で1973年から建設を進めている幹線林道である。幅員7メートル（1部5メートル）、二車線完全舗装の国道並みの林道である。

現在、北海道では「滝雄・厚和線」（計画延長65.4キロメートル）、「置戸・阿寒線」（計画延長71.0キロメートル）、「平取・えりも線」（計画延長82.5キロメートル）の3路線が建設されている。

国は財政構造改革の一環として、1998年度から公共事業の再評価システムを導入した。農水省は林野庁に6名の学識経験者等からなる「大規模林道事業再評価委員会」（期中委員会）をつくり、原則として新規着工の翌年度から5年の倍数年目にあたる路線を対象に、順次再検討を行っている。また、新規着工区間については「大規模林道事業の整備のあり方検討委員会」（委員の大半は期中委員と兼務）が設けられ、検討を行っている。

このような動きに反応して、北海道における大規模林道工事は、急がされるように行われている。これまで、日曜・祭日など休日に工事が行われることはまじなかった。ところがこの数年、法面の緑化作業や擁壁の基礎工事など、下請け業者を中心に工事が頻繁に進められている。

しかし、その割には全体の進捗率は伸びていない。予算面もあるが、現場のいずれもがこれまでの平坦地や緩斜面での工事が終わり、いよいよ山岳地帯の厳しい場所に移っているからである。



工事の先々から、次々と森林が消えていく
（置戸・阿寒線）



巨大な法面をつくりながら工事は進む
（置戸・阿寒線）

急峻な地形に加え脆い地層が多く、工事現場では橋梁、トンネルなどが多用され、それに見合う形で工事量も大きくなっている。上下に切り取られる法面の面積は、通常的林道とは桁違いに大きく、崩落防止の巨大なコンクリート枠が随所に広がっている。

開削に伴う膨大な土石は、盛土に使用してもなお余り、現場近くの河川敷や溪畔林を潰して広大な土捨場が何カ所もつくられている。狭い山間部の工事は山腹だけにとどまらず、大規模な溪流工事に及んでいる。

何よりも問題なのは、道路の延び行く先々で水



源地帯の優れた天然林が消え、野生動物の生息地が分断されていることである。

北海道のヒグマを含めた野生生物の現状は、これまでの開発行為によって次第に生息範囲を狭められ、多くの種で個体数の減少が指摘されている。

生息環境を奪われ大きな打撃を受けたシマフクロウは、昨年姿を消した日本産トキと同じ運命をたどりつつある。分布域がきわめて限定されているナキウサギも、保護対策が一向に進まない中で破壊行為だけが進行しつつある。

大規模林道再評価委員会に提出される林野庁事務局の資料には、検討区域に「いまのところ貴重な動植物は報告されていない」との文言が目立つ。環境面の影響がこの文言で判断されているとは思いたくないが、提供されるごく限られた資料だけでは、現地の本当の自然の姿は見えてこない。

貴重種のありなしは大事だが、これが問題の本質ではない。貴重種のないごくありふれた自然であっても、環境上重要な自然はたくさんある。その地域における生態系をどうとらえるかにこそ意を払うべきで、そのための検討材料が提供されるべきである。

大規模林道事業の推進にかかわる問題の一つは、地域住民を含めて関係者に様々な情報提供が十分なされていないことがある。何よりも肝心の自然環境を保全するための基礎的な調査がきちんと行われていない。あっても不十分な上、それを基にした環境アセスメントも不備、欠陥が多い。

例えば、平成13年度版「様似・えりも区間アセスメント報告書」を見た植物の専門家は、北海道新産植物や道内における希少な新産報告となる植物を8種あげながら、本来すべてを評価対象とすべきであるのに、このうちの2種しか取り上げていないのは問題があると指摘している。

また、地元であって長年ナキウサギの調査を続けている研究者やグループが、予定ルートの上にナキウサギの糞や貯食を確認しているにもかかわらず、「ルート周辺にナキウサギは生息していない」と結論づけるなど、アセスの信頼性も問われている。

そもそも大規模林道は、高度成長時代につくられた大規模林業圏開発構想の中に位置づけられた林道である。構想に盛り込まれた伐採、造林、保育、管理等が基になって計画された林道である。その根拠となった開発構想自体がすでに破綻している中で、大規模林道だけが曖昧模倣とした目的を掲げ、独り歩きしているのが現状である。

自然や環境、森林や林業に対する国民の意識は、地球環境問題が現実となった現在、急速に変化しており、5年サイクルのしかも区間毎の細切れ評価では、全体の正しい評価はできないと思われる。再評価と言うからには、その時点で路線全体を対象にして、「時のアセス」の観点を思い起こして新たな発



ズタズタに寸断された「平取・新冠区間」
台風以前から崩壊していたところもある

想のもとに決断をしなければならない。でなければ、これまでのしがらみにずるずると引き回されて、結局、小手先の修正しかできないことになる。

その事実を物語るように、これまでの再評価作業の中で中止になった区間は、「真室川・小国線（山形）の「朝日・小国区間」ただ1カ所である。一時、休止の決定を見た「平取・えりも線」（北海道）の「様似・えりも区間」と「飯豊・檜枝岐線」（山形・福島）の「山都区間」は、一部縮小して再開している。

北海道における大規模林道事業の進捗率（2001年度末現在）は、「滝雄・厚和線」（1979年着工）80.7パーセント、「平取・えりも線」（1983年着工）26.9パーセント、「置戸・阿寒線」（1994年着工）1.4パーセントで、最も古い路線は24年が経っている。

これまでに完成している路線の年間平均延長は、「滝雄・厚和線」で約2.2キロメートル、「平取・えりも線」と「置戸・阿寒線」ではその半分の約1.1キロメートルである。一部区間を除いてほとんどの区間が、人家のない行き止まりの山奥に向かって工事が進められており、この進捗状況では完成までまだ何年かかるかわからない。

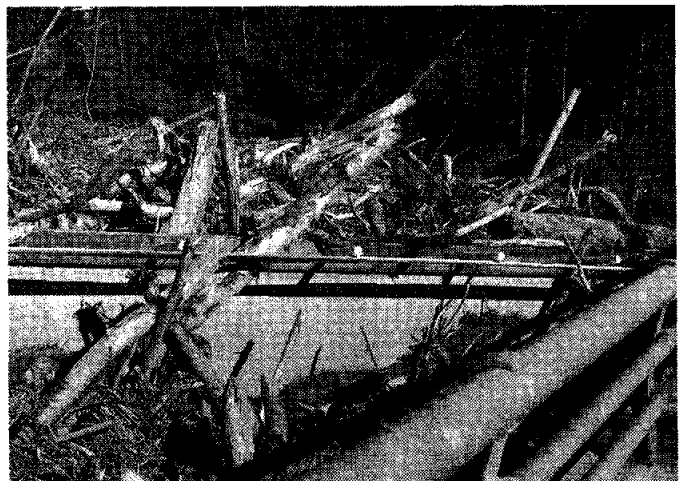
最も工事の進んでいる「滝雄・厚和線」でもこれからが長大な橋梁とトンネル工事が待ち受けており、工事状況は厳しい。開通する前からすでに古い舗装面は痛み、雪解けとともに一部では法面の崩落も繰り返されている。

北海道の場合、仮に完成したとしても冬期間の半年間は眠ることになり、期待される効果は望めそうにない。一部試行的に行われている費用対効果も森林の持つ公益的機能の過大な評価はするものの、道路建設に伴って失われている森林はネグレクトされているなど問題が多い。

昨年秋、日高地方を襲った台風10号は、厚別川流域一帯に未曾有の大惨事をもたらした。この川の源流部には大規模林道「平取・新冠区間」が建設されていて、ほぼ全線にわたって壊滅的な被害を受けた。

これまで大規模林道は、災害時の代替道路として役に立つことは喧伝されても、災害を増大させる道路としての認識はなかった。今後は地域の振興に役に立つどころか、新たな不安材料になる可能性も十分ある。

政府は一昨年三月、1995年に決定した生物多様性国家戦略を全面的に見直して、新たな国家戦略を策定した。生物多様性を国の施策の重要な柱にすると決めた。その重要なステージの一つは、奥山と身近な自然を結ぶ中山間域である。北海道の大規模林道はまさにそこにつくられつつある。大規模林道問題の一つの弱点は、地元に住む人々を含めて、ほとんどの人がその現場を見ていないことだ。森を食いつぶしている現場をつぶさに見て、その上で地域の明日を考えることが何よりも急務である。



流されてきた橋と流木で埋まった三里橋「平取・新冠区間」

昆虫好きの想い(3) — チョウを怖がる子供たち —

黒田 哲

夕食時、小学校に通っている娘との会話です。「○○ちゃん、ムシがキライなんだよ」「そりゃ、毛虫や蜘蛛(昆虫ではないけど)は、気持ち悪がる子だっているさ」「ちがうよ、チョウチョが来ただけで、キャーキャー言っ、しゃがみ込んで、顔を覆っているの」「へー、ソウなんだ」「そんな子、クラスにいっぱい、いるよ」「でも、女の子だけだろ」「いや、男の子でも結構いるんだよ」

昆虫は、とても身近な存在で、子供らの遊び相手でした。ところが、今では、昆虫を怖がる子供が多いのです。それも、身の危険を感じる蜂やグロテスクな幼虫だけではなく、「花よ蝶よ」と美しいものの代表だった蝶ですら、「キモい」といって怖がる子供達が多いとことに、とても驚いています。私は、身近に自然の環境が少なくなり、蝶やトンボなど、昆虫が見られなくなりつつある現実に関心を感じます。同時に、昆虫と接することなく、すべての昆虫を恐れる子供たちが多いことに、とても不安を感じています。

自然保護は、大切なことだと思います。しかし、いつのまにか、昆虫と接する最もポピュラーな「昆虫採集」は、自然を破壊する「悪い行為」とされ、昆虫と接する機会を奪ってきたのではないのでしょうか。多くの場合、多少の昆虫採集を行ったくらいで「いなくなる」、昆虫の絶滅を心配することはありません。

庭や室内の鉢植えに、アブラムシやカイガラムシがたくさんついて、困った方が多いと思います。これらのムシを、ぜひ、薬品にたよらず、ピンセットなどを使い、手で取り除いて退治してみてください。園芸や野菜作りが好きな方で、ムシ退治に多大な労力を払った経験者なら分かると思いますが、簡単と思われる鉢植えですら、ムシ退治は大変です。それが、たとえ狭い範囲でも野外の庭となると、さらに困難です。植物が枯れないかぎり、一時的にムシを減らしたように見えても、すぐに復元する昆虫の回復力が分かるでしょう。まして、複雑な、本物の自然の中で、周りの景色にとけ込んで潜む特定の種類の、採集手段のみで、根絶やしにするのがいかに不可能に近いのか、容易に想像できるでしょう。

昆虫は、その種類ごとに、多い年(豊作)もあれば、極端に少ない年(凶作)もあります。昆虫愛好者は、それらが時に数年間も続くことも経験的に知っています。たまに見られる「バッタの大発生」は多くの方がご存知でしょう。しかし、微妙な発生量の変化となると、よほど関心を持って注目していないと気がつきません。1998~2000年、道内のいたる所で、カラスアゲハが多く見られました。札幌市のビル街でも、度々見られました。ところが、2002年には、ほとんど見られなかったことはご存知でしょうか。これは、野山の自然環境が改善され、カラスアゲハが住みやすくなり、増えた訳ではありません。そして、見られなくなった原因が昆虫採集で採られ過ぎた訳でもありません。このような発生量の変動は、カラスアゲハに寄生する蜂など天敵との量的なバランスや、食樹の状態、発生に適・不適の気候変動などを含めて、それらが複雑に関係していると思われ、私にはどれが原因であるか明確には分かりません。しかし、このような増減は、昆虫では、多くの種類に頻繁に起こっており、とりたてて珍しい現象ではないことは、皆さんが体験上、知っています。カラスアゲハは、生息地環境さえ残っているならば、再び、見られるようになるはずですよ。

例外的に、一部の昆虫には、分布する地域が狭く、特殊な場所に限定される場合があります。蝶の仲間では、大雪山に限られ、高山植物コマクサの生える風衝地に棲むウスバキチョウや、日高アポイ岳周辺に限られ、特殊な地質に生える高山植物キンロバイを食べるヒメチャマダラセセリなどが、その好例です。しかし、これらのように、採集を禁止すべき昆虫類は極めて少数です。また、それらの生息地は、ほとんどが国立公園や国定公園の特別保護地区あるいは各種の天然記念物などに指定され、違法な採集

昆虫好きの想い

を除くと、守られております。

ところが、里山にいる種類のうち、人気のある昆虫が見られなくなった原因を「採集による乱獲が原因」と決めつけ、すぐに「採集禁止」にするのは、あまりにも幼稚で短絡的な判断であると思います。昆虫採集に対して、昆虫すべてが「採らなきゃ減らない」程度に考え、むやみに採集禁止を煽りたてる団体、そして「昆虫が高額で取引されている」などと単なる噂や根拠の無いデマを鵜のみにして、無責任に報道する一部のマスコミに、私は、決してなじみません。ただし、先ほどあげたウスバキチョウ、ヒメチャマダラセセリなどのような希少な蝶類、あるいはオオクワガタのような希少な甲虫類は、高額で取引され、採集圧が高いために、減少・絶滅へ向かっていますが、昆虫類すべてを一括して同等に扱うことは可笑しいと思うのです。昆虫採集の是非について、だいぶ前に、多くの論議があったことを思い出しますが、多くの人にとって今は一面的な結論、「昆虫採集は悪い」と受け取られているのではないのでしょうか。

野生生物の希少価値によって「今のお金に結びつく違法な採集」と「自然を知ろうとする、自然を楽しもうとする採集」に、明確な区別が必要だと思います。例えば、植物について見ると、希少植物の盗掘と山菜やキノコ採りが区別されています。また、捕鯨禁止の理由として、「減少・絶滅に向かっている鯨だから捕るな食べるな」は納得できますが、一部の意見である「知能の発達した哺乳類だから食べるな」は決して納得できません。野生生物の中でも、人為の影響によって減少し生息数の再生・回復が難しい大型動物や草木類が、多量に見られる普通種と区別されています。今は、植物だからすべての植物採集がダメという意見は通らないと思いますが、哺乳類だから鯨がダメという意見はまだ残っており、まして昆虫類だから昆虫採集がダメという意見はかなり大勢であると感じます。これは、余りにも短絡的な考えだと思えます。大切なのは、「身近な自然」を「特殊で狭い存在」にしないことだと思います。

近年、昆虫同好会の新入会員を見ると、学生や若者が非常に少なくなりました。恐らく、身近な自然が少なくなった現実に加えて、上記のような短絡的な意見が通る社会の風潮が広く浸透してきたことが、その原因の一つと思われる。

蝶やクワガタ、カミキリムシなど、一部の昆虫は、立派な図鑑類や解説本が多数出版されています。でも、それらの図版や写真と、実物が持つ迫力や感動とでは、比べ物になりません。ただ、本を漠然とながめているだけで、実物を見ながら手にとってじっくり観察するのとは、情報量が全く違います。昆虫類には、一見だけでは違いが分からない、極めて似た仲間がいくつもあります。私は、蝶の魅力にとりつかれた頃、先輩に「種類の区別すら覚束ない初心者にとって、チラッと見ただけで得られるような、安直な知識はほとんどないに等しい」と言われた経験があります。手にとらずに、本を漠然とながめているだけで何が分かるのでしょうか。実物には、本や図鑑などに書かれていない知識や驚きが、いっぱい詰まっています。

私は、子供に限らず大人でも誰でも、興味があれば手にとり、調べたいという知識欲があれば、それを追求すること、そしてそれを妨げない環境が大切だと思います。本や与えられた知識のみに偏らず、いろいろな方法で実際に体験すべきだと思います。

昆虫を怖がる子供たちは、蚊や蠅が少なく、自然な草原や湿地を破壊して造成した芝生のある公園を「快適だ」と思い、雑木林を切り開きシラカンバやサクラ類を植えたオートキャンプ場やゴルフ場を「緑豊かな美しい自然だ」と感動するのも知れませんが、しかし、身近な自然が失われ人工的な自然が増えている現実について、子供たちは「このままではヤバイ」と感じるのでしょうか。大人や子供を問わず、自然に興味をもつ誰もが、多くの昆虫に接し、奥深い自然の魅力を感じるならば、それが、失われつつある自然への関心、そして自然保護への関心にも、きっと、つながるはずだと信じています。

花フェスタ開催に向けて——北海道新聞社事業局

花フェスタ実行委員会事務局を預かっております北海道新聞社事業局は、本誌の昨年11月号でご指摘を受けた「花フェスタにおける希少植物・高山植物の販売」に関して、その後に北海道自然保護協会からご提出いただいた要望書に基づいて検討してまいりました。

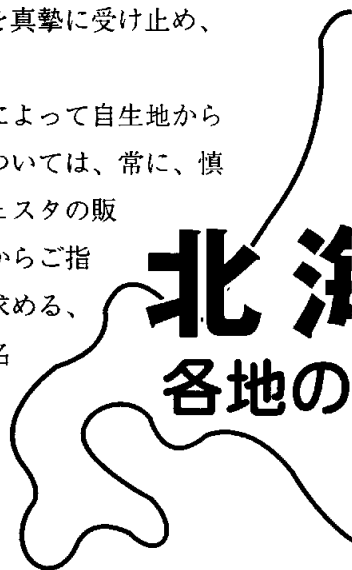
北海道新聞社事業局では北海道自然保護協会から1997年に花フェスタでの高山植物の取り扱いに関してご指摘をいただいた点を踏まえ、98年以降、開催に当たりまして高山植物の取り扱いについて一定のガイドラインを設けてまいりました。しかし、誠に遺憾ながら、その後の花フェスタ開催に関しましてはチェック体制が機能せず、会場内で希少植物が販売されていたことについて深く反省しております。

その反省の上に立ち、北海道自然保護協会からご提出いただいた要望書を真摯に受け止め、今後の「花フェスタ」開催の方向性について検討させていただきました。

北海道新聞社事業局としましては、北海道の希少植物・高山植物が盗掘によって自生地から失われることを防ぐために、盗掘を助長すると考えられるそれらの販売については、常に、慎重に判断していきたいと考えております。そうした考えに基づいて、花フェスタの販売コーナーの出店に関する、目下の具体的なガイドラインとしては、同会からご指摘された(1)「高価な希少植物の販売」については関係する業者に販売自粛を求める、(2)植物の名称については植物分類学に基づいた正式な名称を使用する、(3)名称の表示は植物分類学に基づいて和名をカタカナ表記とする、(4)園芸化されない希少野生植物の取り扱いに関しては、北海道に固有または国内では北海道に限られるなどの希少植物について実際の生育地における状況を認識した上で、少なくとも古くから栽培増殖された栽培品だけを取り扱い盗掘品をまったく扱っていない旨を明示すると言う4点を設けます。ガイドラインの厳格な再整備とチェック体制の強化とあわせて、販売業者に対応していきたいと思っております。

また、「花フェスタ」を一般市民に野生植物、とくに希少植物の重要性を啓発する機会と捉え、今年から会場内に同趣旨の紹介コーナーを設け、広く市民の理解を求めて行きたいと考えております。

北海道新聞社事業局としましては、今後も「花フェスタ」が広く市民に愛されるイベントとして開催され続けるために、北海道自然保護協会など自然保護に関わる市民団体と相談してまいりたいと思っております。



宗谷岬ウィンドファーム計画

大館 和広
(理事)

03年11月「風力発電用風車へのバードストライクに関するシンポジウム」が札幌で開催された。今まで風力発電用風車に対して個々の人が色々な懸念を持っていたが、この種のシンポジウム等では行われてこなかったのが、今回の開催は画期的と言えた。

この中で宗谷岬のウィンドファーム計画が明らかにされた。計画は稚内市宗谷岬近くの丘陵に57基の風車を建て、5万kwhの発電をする国内最大規模の施設で、本年4月の着工が予定されている。

この計画に対し、自然環境への影響が大きい(特に渡り鳥の移動に関して)と鳥類研究者、環境団体メンバーらが自発的に検討委員会を作り、問題点を指摘している。建設予定地は、オオワシ・オジロワシの渡りのルートと重なり、悪影響が心配される。

問題は他にもあり、これほどの大規模な事業(国から補助もでる)でありながら、環境影響評価が義務づけられてはおらず、自然環境や野生動植物への悪影響が心配されても、公的な機関での検討がされない。稚内市には風力発電施設ガイドライン(00/4/1制定)があるが、法的な拘束力はない。制定された背景を察すると以前の反省があったと思うが、今回は活かされているとは思えない。

事業者はこのガイドラインに沿って環境調査を実施しているが、けて十分とは思えず、「影響は回避もしくは低減される」と結論づけるだけの調査内容ではない。

もしも、このまますんなり計画が実施されれば「日本国内、何処にでも風車が建設されることが可能になる」という懸念まで生じる。

「クリーンエネルギーと言われる風力発電は、地球にも自然にも動植物にもやさしくあってほしい」という思いを、協会は各方面に働きかけて、この計画の見直しを求めていきたいと思う。(紋別市在住)

道
ニュース

カラスと共存すること———— 竹中万紀子

日本人にとって、カラスは太古から身近な存在だったらしい。烏山、烏丸通等の地名も多い。古事記を初め、多くの民話にも頻繁に登場する。「ゴンベが種蒔きや、カラスがはじくる」の諺にあるように、カラスの知恵に感心すると共に、困り者でもあったはずである。ともあれ、昔の記録は古来から日本の生態系でカラスは比較的個体数が多く、重要な役割を果たしてきたことを示唆する。

私はニューヨーク市郊外に8年ほど住んだことがあり、東海岸から中西部まで旅行したが、どこにでもカラスがいるという状況はお目にかかったことがない。パリも、カナダのケベックやモントリオールも然り。海外の都市を視察で巡ってきた人に「外国の先進都市はカラスが少ない。日本の都市のカラスの多さは後進性の反映。ゆえにカラスは駆除すべき」との「貴重な」ご意見をたまわったこともある。でもね、カラスに目くらましの前に「聞いて」ニューヨーク周辺のゴミ捨て場にはアライグマがわんさか誘引されるし、キツネも来る。「ウォーター・ラット」と呼ばれる巨大なげっ歯類もやってくる。ロンドンでもパリでも、イタチの仲間などがゴミに誘引されて住み着く。いわゆる「先進都市」にもカラスの代わりにゴミ荒らしをする存在はちゃんといるのだ。ゴミの管理が悪いと、世界中どこでも同じ問題が起こる。アフリカのエコツアーの宿泊施設でも、観光客が残すゴミに誘引される野生動物が問題となっている。要するに、その地域に比較的多く生息していて、人間が排出する有機物を利用して生きる種は鳥類だろうと哺乳類だろうと、「ゴミ捨て場の問題児」となり得る。それが、日本ではたまたまカラスなのだ。

個体数の多さは、生態系で一定の重要な役割を果たしていることの反映。カラスの群の下に立つと一目瞭然だ。ヤマブドウ、ツルウメモドキ、ナナカマド、ヤマウルシ等、多くの種子が糞の中から見つかる。もっと詳しく見ると、農林業害虫となり得るカメムシや甲虫も食べている。ゴミは彼らの主食ではない。

札幌圏では、過去約10年間のカラスの生息数には変化がなく8千~9千羽で推移している。これが当地域の彼らの定員(環境収容力)と見なしてよい。このレベルを保ち共存するには、カラスとゴミを物理的に遮断するための少しの労を惜しまないことと、この地域が有する豊かな自然を良好な状態に保つことが重要だ。特に、野鳥であるカラスが自然の恩恵を享受し続けられるかどうかが大いなる要素であることを忘れてはならない。

(会員・札幌市在住)

2004年自然保護学校開校のお知らせ

主 催：(社)北海道自然保護協会
札幌市中央区北3条西11丁目 加森ビル6F

北海道自然保護協会では私たちを取り巻く環境を良い状態に保つために、自然を良く知り、自然が大切であることを理解していただくよう毎年自然保護学校を開校しております。

今回は「北海道の公共事業・その行方」をテーマにおこないます。各地で実施、計画されている大規模林道、森林問題、川の変化、ダム、湿原の再生などの問題点を各講師に講義していただきます。

下記の日程で行いますので多くの方の参加をお願いいたします。

日 時：① 2004年2月17日(火) 開校式 ② 2月24日(火) ③ 3月2日(火)
④ 3月9日(火) ⑤ 3月16日(火) 閉校式

いずれも18時30分より20時30分まで

場 所：北海道環境サポートセンター・多目的ホール

(札幌市北区北7条西5丁目5 札幌千代田ビル1F ヨドバシカメラ北向い)

テーマ：「北海道の公共事業・その行方」

講 師：鮫島惇一郎、俵 浩三、佐藤 謙、佐々木 聡、市川 守弘

資料代：4,000円、協会会員・学生3,500円 1回目受講時に徴収いたします。

申し込み・問い合わせ：北海道自然保護協会 TEL・FAX 011-251-5465

eメール nchokkai@jade.dti.ne.jp

*諸事情により日程の中で講師の順序が変わることもあります。

寄贈図書紹介(寄贈順)

① 「市民が止めた千歳川放水路」 俵 浩三氏より

—公共事業を変える道すじ—

日本野鳥の会・北海道自然保護協会 編 北海道新聞社発行
とりかえそう北海道の川実行委員会

② 「知床の昆虫」 斜里町立知床博物館より

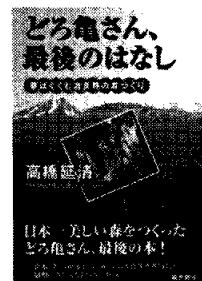
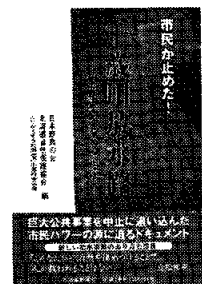
—しれとこライブラリー⑤—

斜里町・斜里町教育委員会

③ 「どろ亀さん、最後のはなし」 八木 健三氏より

—夢はぐぐみ富良野の森づくり—

高橋 延清 著 新思索社



活動日誌

2003年11月

- 21日 第5回拡大常務理事会
- 21日～22日 大規模林道「様似・えりも」区間の現地調査

2003年12月

- 13日 第3回理事会
- 15日 「花フェスタ」北海道新聞社との話し合い
- 24日 臨時常務理事会
- 26日 大規模林道・2区間事業継続決定に関する抗議、要請、道政記者クラブにて記者会見（他団体と共同）

2004年1月

- 17日 自然保護講演会
北海道の公共事業を考える
ー大規模林道事業ー
- 17日 大規模林道北海道ネットワーク結成
第1回運営協議会
- 22日 第6回拡大常務理事会

要望書など

■2003年11月

「花フェスタ」における希少植物・高山植物の販売に関する要望書

■2003年11月21日

大規模林道「平取・えりも線」の「静内・三石区間」と「様似・えりも」区間に関する意見の補足

■2003年11月7日

サハリン大陸棚油田・ガス開発にともなう環境問題に関する要望

■2003年11月24日

「11月22日の道有林155林班56小班における現地調査に関する緊急意見書」の提出

■2003年12月10日

12月14日の（林野庁）現地調査への参加確認に関する回答及び質問状

■2003年12月26日

大規模林道「平取・えりも線」2区間の事業継続決定に関する抗議及び要請（いずれも当協会等5団体連名で提出）

2004年度総会のご案内

2004年度の通常総会について、その概要をお知らせしますので、万障繰り合わせてご出席をお願いいたします。なお、今回は理事改選期にあたりますので、詳細については、別途お知らせいたします。

日時：5月15日（土）13時から
場所：かでる2・7

北海道高山植物盗掘防止ネットワーク委員会全体集会開催

日時：2月29日（日）午後1時～
場所：クリスチャンセンター大ホール
（札幌市中央区北7条西6丁目）
011-736-3388)

問合せ：事務局長 長谷川雄助
（勤務先011-738-8211
携帯090-6266-3365)

第6回フォーラム・野幌の森 「身近な自然のシンボル」

～野幌の森の貴重性～

話 …佐藤 謙・松山 潤の両氏
日時…平成16年3月6日（土曜日）
13時30分より（2時間程度）
場所…「かでる2・7」710会議室
札幌市中央区北2条西7丁目
主催…フォーラム野幌の森

「大規模林道・北海道ネットワーク」の結成

道内各地の団体が個別に対応してきた大規模林道問題に関して、昨年来、道内の団体がこぞって、林野庁や緑資源機構などへの申入れ活動など、共同行動や共同調査を積み重ねてきました。去る1月17日、運動をより一層強化するために標記のネットワークが結成されました。構成団体は、大雪と石狩を守る会、ナキウサギふあんくらぶ、北海道自然保護連合、当協会の5団体です。

新 会 員 紹 介

2003.10.6～2004.4.1まで

【A会員】龍嶋 道男、藤田 直樹、吉本 美絵

寄 付 金

梅 沢 俊	10,000
ブーケ・ド・ソイイユ	20,000
林 谷 ゆかり	1,000
土 屋 文 男	4,000
中 本 陽 三	10,000

* お知らせコーナー *

自然保護講演会と出版記念会

『台風10号と平取ダム』

— 千歳川放水路計画に学んだダムと川 —

20世紀最後の大規模土木公共事業として計画された千歳川放水路が市民の粘り強い反対運動でストップしてから4年が経過しました。しかし日本全国でなお自然を破壊するムダな公共事業が続けられています。『市民がとめた！千歳川放水路計画』の出版を祝い、あわせて、今年の台風10号で明らかになった平取ダムや、ムダなダムの典型であるサンル・ダムなどの問題を考えたいと思います。ぜひお気軽にご参加ください！

日 時：2004年2月28日（土）13：30～17：15

場 所：北海道大学クラーク会館 2階大集会室（札幌市北区北8条西7丁目：クラーク像の南側2階建て）

参加無料：資料代 500円（申し込みは不要です）

〈プログラム〉

第1部：ドキュメント映像が語る台風10号被害の「真実」台風10号が教えてくれたこと…

稗田 一俊（北海道自然保護協会理事）

第2部：平取ダムの問題点と21世紀の河川管理計画

コーディネーター：小野 有五（とりかえそう北海道の川実行委員会代表）

平取ダム計画はどうなっているのか

市川 守弘（弁護士）

平取ダムを科学的に検証する…

佐々木 聡（フリーランス・カメラマン）

二風谷ダム判決からみた平取ダム…

貝澤 耕一（NPO法人チコロナイ理事）

ムダなダムの典型：サンル・ダム…

宮田 修（サンルダム建設を考える集い）

「淀川方式」と住民参加…

高田 直俊（日本野鳥の会）

講演会終了後『市民が止めた！千歳川放水路計画』（北海道新聞社・刊）出版記念会

時 間 17:30～19:30（百年記念会館・きやら亭

TEL 716-2111 内線 3213）

参加費 3,000円（2月16日までに電話、FAX、

メールでお申込みください）

お問い合わせ・出版記念会へ申し込み先：

北海道自然保護協会

TEL/FAX 011-251-5465

Mail:nchokkai@jade.dti.ne.jp

主催：(社)北海道自然保護協会・とりかえそう北

海道の川実行委員会・市民ネットワーク

後援：(財)日本野鳥の会ウツナイサンクチュアリ

協会のホームページ

<http://www.jade.dti.ne.jp/~nchokkai/>

協会では、会誌やNC（会報）の他に、ホームページでの活動報告・意見募集も行っておりますので、ぜひご覧になってください。会員の皆さんには、協会宛に直接の手紙やホームページ上の意見欄にご意見を寄せていただくことを願っております。

会費納入のお願い

会費納入については日頃ご協力をいただいておりますが、未納の方は至急納入下さいますようお願いいたします。

個人A会員 4,000円

個人B会員 2,000円

（A会員と同…世帯の会員）

学生会員 2,000円

団体会員 1口 15,000円

〈納入口座〉

郵便振替口座 02710-7-4055

北洋銀行大通支店（普通） 0017259

北海道銀行本店（普通） 0101444

札幌銀行本店（普通） 418891

〈口座名〉

社団法人 北海道自然保護協会

※ この紙は再生紙を使用しています。

